

## ひとりひとりの子どもを見つめて ②

赤羽美代子

四月号で紹介したM夫の行動の記録を続けることとする。

突然、五歳児の男子S・T・N・Yが「先生を逮捕する」

と言って、床に座っていた私の頭上から、重なり合って倒れてきた。「何もしていません」「いや逮捕する」と、しばらく

揉み合ってから、私の手を持ち乱暴に連行しようとする。私

は目をM夫に注いで助けを求めた。M夫は全身を緊張させた。

いきなり大きな張りのある声で「何だよ、先生は何もしてな

いぞ」「何だ、M夫なんかだまってる」とM夫の前にNが立ち

はだかる。M夫はいきなりNを押しつけて「先生は何もしないぞ、あっちへ行けよ」。側にいたT子もA子も彼に加勢す

る。「そうよ、あっちへ行きなさい」その勢いに驚いてか「わ

あーっ」と四名は行ってしまった。M夫はSたち四名の後ろ

姿をじっと見送っている。M夫の母親が「家ではいつも、S

たち四人の話ばかりしているんですよ」と語ったことを思い

出す。

M夫の今日は、教師との満足したかわりを持ち、また、

日頃自分が気にしているSたち四名ともかわることができ

た。その心の内の喜びが、きりりっと立っている彼の姿勢に

見ることができ

K夫が「先生、Maちゃんが頭から水をかぶりましたよ」と

知らせにくる。Maは言葉の出ない障害児である。Maは水が大

好きで一日に七、八回の着替えをする。私の周囲にいた子ど

もたちは、Maの着替えに教師が時間をとられることを心得て

いて、それぞれの遊びに散っていった。

M夫は私の側を離れずに、私をじっと見ている。「Mちゃ

ん、先生ね、Maちゃんの着替えしてくるわね。遊んで待つて

てくれる？」「いいよ」M夫は一語言って、なお私を見てい

る。私はMaのいる方向に急ぎ走りながら、彼の視線が私の後

る姿を追っているのを感じる。M夫に背を向けたまま、M夫に右手を振った。左手も高く上げて振った。

一瞬、私の後ろ姿とは、子どもたちにどんな感じを持たせる姿なのかと、とまどった。暖かいまなざしと、喜びを持つた人の姿を感じとらせる姿なのだろうか。それとも、疲労を背負った板のような味気ない人の後ろ姿では？ 私は裸で立たされているような、言いようもない恥ずかしさと、また、子どもたちに与える何物も持たない無力な自分の後ろ姿を思い、寒さむとした。

Maの着替えを済ませ、私は庭に出た。砂場でM夫が「先生、ちょっときて」と私を呼んでいる。M夫の前には、中位の大きさの穴が一つ掘られている。その横に一つ山があり、もう一つの山を製作中である。「先生、この穴からね〇〇(怪獣の名前か?)がポワーンと空に飛びでるんだよ」掌を合わせながら、力強く大きな手で、ポワーンと上空に向けて発射させた。よく見るとその穴の壁には、シャベルの跡が、なまなましく、力強く残っている。何か底知れぬ深さと、大きなエネルギーを感じさせられた。

M夫は今、ポワーンと言う大きな音と共に、広い空に向か

って閉じていた心の扉を開いたに違いない。「先生にこの山を一つあげるね」「まあ、嬉しい。先生ね、M夫ちゃんのお山に遊びに行ってもいい？」と言いながら、落ちていた細い木の枝を隣のM夫の山に掛けた。

この橋が、M夫と私の掛け橋になるような気がした。「いいよ。もっと太いのを持ってくるよ」M夫は庭に捜しにかけて行った。息を弾ませて拾ってきたやや太めの木の枝を、私の掛けた細い枝の横に掛けた。「先生は、トコトコって、太いのを渡って僕の山に来るんだよ。僕は、先生の掛けた橋を渡ってさ、先生の山に行くからね」

M夫も私も、同時に共感し合ったようである。私は立ち上がって他の子どももの所に去った。

此の日、彼は降園時に、「先生、また、あしたくるね」と元気に帰って行った。

(霊南坂幼稚園)

